

ジャイナ教空衣派における  
「タントラ的な美徳の瞑想」〈3〉  
— 「形象に関わる瞑想 (rūpasthadhyāna)」 と  
「形象を超えたものの瞑想 (rūpātītheadhyāna)」 について—

是 松 宏 明

はじめに

本稿は『東洋学研究』第57及び58号の拙稿に引き続いて、Bālacandra Siddhānta Śāstrī, *Jñānārṇava*, Jīvarāja Jaina Granthamālā, Hindī Vibhāga 30, 1977 を底本として、シュバチャンドラ (Śubhacandra) によって著されたヨーガ文献『ジュニャーナールナヴァ (*Jñānārṇava*)』(以下、JA) の第36章「形象に関わる瞑想 (rūpasthadhyāna)」と第37章「形象を超えたものの〔の瞑想〕 (rūpātītha)」における瞑想法について論じる。

そして「ジャイナ教空衣派シュバチャンドラ著『ジュニャーナールナヴァ』所説の『タントラ的な美徳の瞑想』」の連載の総論として、第38章「美徳の瞑想の結果 (dharmadhyānaphala)」の内容について論じる。

第1章 JA36章「形象に関わる瞑想」

rūpastha は「形象に従事した」という意味であるが、その名前の通りに形象に関わる瞑想は様々な特性を持った一切智者を観想の対象とする、形象に関わる瞑想を主題とする JA36章では多くの一切智者の特性の形容が並ぶ。瞑想自体は前半2種類の「タントラ的な美徳の瞑想」と比べると極めて簡素な構造となっている。

yogīśvaraṃ tam īśānam ādidevaṃ caturmukham /

anantaṃ acyutaṃ śāntaṃ bhāsvantaṃ bhūtanāyakaṃ // JA 36.28

sanmatīṃ sugataṃ siddhaṃ jagajjyeṣṭhaṃ pitāmahaṃ /

mahāvīraṃ muniśreṣṭhaṃ pavitraṃ paramākṣaraṃ // JA 36.29

sarvajñaṃ sarvadaṃ sārvaṃ vardhamānaṃ nirāmayam /

nityam avyayaṃ avyaktaṃ paripūrṇaṃ purātaṇam // JA 36.30

ity ādisānvayānekapuṇyanāmopalakṣitaṃ /

smara sarvataṃ devaṃ tam īśvaraṃ anāmayam // JA 36.31

ヨーガ行者の主宰神であり、かのイーシャーナ (īśāna) であり、アーディデーヴァ (ādideva) であり、四方に顔を向けており、無限であり、不朽であり、寂靜であり、輝きを持つ者であり、生類を導くものであり、正しく思慮する者であり、善趣であり、成就者であり、世界で最上の者であり、偉大な父であり、偉大な勇者であり、最上のムニであり、清浄であり、最高の不滅者 (paramākṣara) であり、一切智者であり、一切を与える者であり、一切にとって有益な者 (sārva) であり、栄えつつある者であり、病の無い者であり、永続する者であり、滅びることのない者であり、未顕現であり、完全に満たされた者である古の者を、と意義深い多くの福德の名称で理解されている遍在する神であるかの無病の主宰神を念想せよ。

形象に関わる瞑想を実践することによって、瞑想者は瞑想対象である一切知者になるという。

ananyāśaraṇaḥ sākṣāt tatsamlīnaikamānasah /  
tatsvarūpam avāpnoti dhyānī tanmayatām gataḥ // JA 36.32

他の庇護者のない (ananyāśaraṇaḥ)<sup>1</sup>、直接それに心を完全に融合させて、一体化した瞑想者はその本質を獲得する。

sākṣān nirviṣayaṃ kṛtvā sākṣam<sup>2</sup> cetah sa saṃyamī /  
niyojayaty aviśrāntaṃ tasminn eva jagadgrau // JA 36.40

tadguṇagrāmasamlīnamānasas tadgatāśayah /  
tadbhāvabhāvito yogī tanmayatvaṃ prapadyate // JA 36.41 tathā hi,

yadābhyāsavaśāt tasya tanmayatvaṃ prajāyate /  
tadātmānam asau dhyānī sarvajñībhūtam īkṣate // JA 36.42

eṣa devaḥ sarvajñaḥ so'haṃ tadrūpatām gataḥ /  
tasmāt sa eva nānyo'haṃ viśvadarśīti manyate // JA 36.43

かの自制者は感覚器官を伴った意識を直接対象から離して、まさにかの世界の師と間断なく結び付いている。思考器官をかの徳性の集まりに没入し、かの庇護所へと至ったかの存在を生じたヨーガ行者は同一性 (tanmyatva) に至る。まさに同様に、修練によって、この同一性が生じる時、かの瞑想者は自身が一切智者になったと見る。この神はかの一切智者である。それは私である。その状態に到達した者である。それ故、彼こそが他でもなく私であり、世界を見る者である、と考えられている。

1 校訂者のヒンディー語訳では「上述された一切智者以外の他のものへの庇護を認めないヨーガ行者」と補って訳されている。

2 注釈によると sendriya 「感覚器官を伴った」。

シュバチャンドラは「形象に関わる瞑想」を実践するヨーガ行者が到達する境地を「同一性」と呼んでいる。更に梵我一如思想を象徴する著名な大命題 (mahāvākya) である「彼は私である (so'ham)」や、サーンキヤ学派のプルシャを連想させる「世界を見る者」などの表現も用いられており、他学派の影響が考えられる。

## 第2章 JA37章「形象を超えたものの瞑想」

rūpātīta とは「形象を超えた」という意味である。「形象を超えたものの瞑想」では無形象の個我を観想の対象とする。「形象を超えたものの瞑想」に関する37章も形象に関わる瞑想と同様に瞑想の手順の説明自体は簡潔なものに過ぎない。そして、この章の前半は「形象を超えたものの瞑想」と関係のない話題となっており、正道から外れた邪道の瞑想をやってはならないという訓戒となっている。

vītarāgaṃ smaranyogī vītarāgo vimucyate /

rāgī sarāgaṃ ālambya krūrakarmāśrito bhavet // JA 37.1

愛欲を離れた者を憶念するヨーガ行者は愛欲を離れた者として解脱する。愛欲のある者は愛欲を伴ったものに依拠して、残忍な業と結びついた者となるだろう。

mantramaṇḍalamudrādīprayogair dhyātum udyataḥ /

surāsuranaravrātaṃ kṣobhayaty akhilaṃ kṣaṇāt // JA 37.2

マントラやマンダラ、印契等の修法をして瞑想に励む者は全ての神や阿修羅、人間の集まりを一瞬で動揺させる。

krudhasyāpy asya sāmartyam acintyaṃ tridaśair api /

anekavikriyāsāradyānamārgāvalanbinaḥ // JA 37.3

様々な害意ある本質的でない瞑想の道に依拠する怒った者のこの力は神々によってですら想像できない。

bahūni karmāṇi munipravīrain vidyānuvādāt prakāṭikṛtāni /

asaṃkhyabhedāni kutūhalārthaṃ kumārgakudhyānatāni santi // JA 37.4

卓越した勇者である牟尼達によって、『ヴィッディヤーヌヴァーダ (vidyānuvādā)』<sup>3</sup>を通して、好奇心のための数え切れないほどの異なった悪い道や悪い瞑想に至る多くの行為が明らかとなった。

---

3 pūrva に含まれる聖典文献の一つ。

またここでシュバチャンドラは愛欲や怒りなどの妄執に駆られた世間的な神々への現世利益を目的とした祈祷に対して批判的な意見を述べている。

kṣudradhyānaparaprapañcaturā rāgānalād<sup>4</sup> dīpitāḥ mudrāmaṇḍalayantra-mantrakaraṇair  
ārādhayanty ādr̥tāḥ /

kāmakrodhavaśīkṛtān iha surān saṃsārasaukhyārthino duṣṭāsābhihatāḥ patanti narake  
bhogārtibhir vañcitāḥ // JA 37.10

劣った瞑想で他人を惑わすことに長けた者達は愛欲の炎で輝いており、印契やマンダラ、ヤントラ、マントラという手段によって、この世界で愛欲や怒りに支配された神々を恭しく (ādr̥ta) 礼拝する。輪廻世界での幸福を望んでいて、邪悪な望みに悩まされている、享受という苦悩に騙された者達は地獄に落ちる。

JA37.14 になってから、本題の「形象を超えたものの瞑想」の解説に入る。その瞑想対象は形象に関わる瞑想と違って、形のない個我としての自己自身である。

bhavaprabhavasambandhanirapekṣā mumukṣavaḥ /

na hi svapne'pi vikṣiptaṃ manaḥ kurvanti yoginaḥ // JA 37.14

atha rūpe sthīr̥bhūtacittaḥ prakṣiṇavibhramah /

amūrtam ajam avyaktaṃ dhyātum prakramate tataḥ // JA 37.15

cidānandamayam śuddham amūrtaṃ jñānavigraham /

smared yatrātmanātmānaṃ tad rūpātītam iṣyate // JA 37.16 athavā,

vadanti yogino dhyānaṃ cittam evam anākulam /

kathaṃ śivatvam āpannam ātmānaṃ saṃsmaren munīḥ // JA 37.17 tad yathā,

vivicya<sup>5</sup> tadguṇagrāmaṃ tat svarūpaṃ nirūpya ca /

ananyāsaṃ jñānī tasminn eva layaṃ vrajet // JA 37.18

存在と [その] 発生の関係に無関心である解脱を希求するヨーガ行者達は夢の中でですら決して精神を動揺させない。直後に [対象] 形態に心が堅固となった その時誤謬を減した者は抽象 (amūrta) であり、不生であり、未顕現のものへの瞑想を始める。そこで精神 (cit) と歓喜から成る、純粹であり、抽象であり、知識の総体 (vigraha) として自身で自己を憶念すべし。それは形態を超えたもの (rūpātīta) と見做される。あるいは、ヨーガ行者達はこのように混乱のない心を瞑想と呼ぶ。牟尼はどのようにして吉祥性を獲得した個我を憶念すべきなのか。それはこのように。その美德の集まりを集めて、またその本質を

4 原文 rāgānalod。誤植の可能性が高いため、本文では訂正した。

5 M 写本の異読の vivecya となっており、注釈では vivecya として扱っており、ヒンディー語訳もそれにならっている。

検証して、無比なる庇護所である智慧ある者はまさにここに没入 (laya) するだろう。

注目すべき点は「形象を超えたものの瞑想」では瞑想者と最高我 (paramātman) との合一が説かれていることである。

tatguṇagrāmasampūrṇaṃ tatsvabhāvaikabhāvitam /

kṛtvātmānaṃ tato dhyānī yojayet paramātmani // JA 37.19

自分をその美德の集まりに満ちたその本性と一つになるようにして、そして瞑想者は最高我と結び付けるべきである。

pṛthagbhāvam atikramya tathaikyam paramātmani /

pṛapnoti sa muniḥ sāksād yathānyatvaṃ na vidyate // JA 37.30

uktaṃ ca,

niṣkalaḥ paramātmāhaṃ lokālokāvabhāsakaḥ /

viśvavyāpī svabhāvastho vikāraparivarjitaḥ // JA 37.30.1<sup>6</sup>

別異性の状態を超越して、かの牟尼は最高我との合一を直接的に獲得する、他者性が認識されないように。また言われている。最高我と私は分離しておらず、世界と非世界を照らす者であり、世界に遍満しており、本性そのものであり、変化から離れている。

個我と最高我の合一という概念は多元論を説くジャイナ教と相容れないように見えるが、ジャイナ教でも「最高我」は別の意味合いのテクニカルタームとして使用される。特に空衣派では感覚的な喜びや肉体の美しさに固執する者の「外面志向の個我 (bahirātman)」と、ジャイナ教の教えに目覚めて精神性に関心を示す者の「内面志向の個我 (antrātman)」と一切知者や解脱者の「最高我」という三種類の個我説が説かれる<sup>7</sup>。そのため、シュバチャンドラは空衣派の伝統に沿った意味での最高我を指していると考えられる。

### 第3章 JA38章「美德の瞑想の結果」

JA38章は「美德の瞑想の結果 (dharmadhyānaphala)」と題されている。しかし実際に美德の瞑想に言及している偈頌は少ない。

anuprekṣās ca dharmasya syuḥ sadaiva nibandhanam /

cittabhūmau sthīrīkṛtya tāḥ svarūpaṃ nirūpaya // JA 38.3

6 刊本で 37.30.1 となっているが 37.30.1 以降の番号にあたる偈頌がない。

7 空衣派の三種類の個我説はクンダクンダ (Kundakunda、約 2-3 世紀) によって説かれ、SS の著者もその説を採用している。[Sogani : 2016 : 171-173] を参照。

そして想起こそが常に美德 [の瞑想] を構成するものとなり得る。心の場所でそれら (想起) を堅固に為して、本質を見極めよ。

ジャイナ教の教義綱要書 *Tattvārtasūtra* (以下 TAS) の瞑想の記述の中には、瞑想の時間は1 ムフルタ間 (= 48 分間) までであり、瞑想者は最上の関節の堅固さを持たなければならないという条件が示されている。

uttamasamhananasyaikāgracintānirodho dhyānam āntarmuhūrtāt / TAS 9.27

ムフルタ間まで、最上の関節の強度 (samhanana) [の者] が一点に思惟を制御することが瞑想である。

瞑想の時間が何故ムフルタ間までなのか、という理由は TAS の空衣派最古の注釈書である *Sarvārthasiddhi* (以下 SS) によると、それ以上の時間、一点への思惟を保持することが困難であるためであるという<sup>8</sup>。

「関節の強度」とは個性業 (nāmakarman) という生き物の個性を決定するジャイナ教における業の一種で、骨格や関節の堅固さを6段階で決める。TAS では6種類の内の関節の強度の中で最上のものを持つ者が瞑想に相応しいと説く。以上の記述と同様の規定が JA38 章にもみられる。

na svāmitvamataḥ śukle vidyate'tyalpacetasām /

ādyasamhananasyaiva tatpraṇītaṃ purātanaḥ // JA 38.6

あまりにも非力に過ぎる意識の者達の意識には純粹 [の瞑想] における実践者としての能力は認められない、と理解されている。最高の関節の堅固さ [を持つ者] にこそ、それ (純粹の瞑想) があることが古の者達によって説かれた。

ādyasamhanananopetā nirvedapadavīm śrītaḥ /

kurvanti niścalaṃ cetaḥ śukladhyānaḥsamam narāḥ // JA 38.7

最上の関節の強度を備えており、超俗の道 (nirvedapadavī) に依拠する人々は意識を純粹の瞑想に適う堅固なものにする。

JA では純粹の瞑想は最高の堅固さを持つ者にこそ可能であると説いている。TAS の瞑想の条件に個性業の関節の堅固さが優れていなければならないという考え方は JA にも受け継がれている。

<sup>8</sup> tataḥ paraṃ durdharatvād ekāgracintāyāḥ / SS 872 より抜粋

dharmadhyānasya vijñeyā sthitir āntarmuhūrtikī /

kṣāyopāsamiko bhāvo leśyā śukalaiva śāsvatī // JA 38.12

美德の瞑想の持続期間はムフルタ (48分) 間までであると知るべきである。[美德の瞑想をする者は<sup>9</sup>業の]抑止と滅尽(kṣāyopāsamika)<sup>10</sup>の状態にある。レーシャー(leśyā)<sup>11</sup>は常に白色である。

美德の瞑想はムフルタ間までであるという。これも前述したTASの瞑想の定義と共通している。美德の瞑想の実践者は業の抑止と滅尽の状態にあり、個我の純度を表すレーシャーも白になるという。

JA38.14からは瞑想によって全ての執着を捨てた者が天界に行くという流れで、天界での享楽の描写が続く。

tattrācintyamahāprabhāvakalitaṃ lāvaṇyalīlānviṭaṃ sragbhūṣāmbaradivya-lāñchanacitaṃ candrāvādātaṃ vapuḥ /

saṃprāpyonnataṅvīryabodhasubhagaṃ kāmajvarārticyutaṃ sevante vigatāntarāyama atulaṃ saukhyaṃ ciraṃ svargaṇaḥ // JA 38.15

そこで不可思議な大神通力を備えており、妙なる遊戯を伴っており、花輪や装飾品、衣服、神々しさに満ちた、月のように白い肉体を完全に獲得して、高まった勇氣と知識によって幸運な者であり、愛欲の苦熱を離れており、計り知れない程の障害を滅した幸福な者を天人たちが常に世話を為す。

そして天界の暮らしの後に天界から降り立ち、徳のある家系に誕生するという。

tasmāc cyutvā tridivapaṭalād divyabhogāvasāne kurvanty asyāṃ bhuvī naranute puṇyavaṃśe'vatāraṃ /

tatraiśvaryaṃ caramavapuṣāṃ prāpya devopānītair bhogair nityotsavaparīnatair lālyamānā

9 編纂者のヒンディー語訳の補いに従った。

10 ジャイナ教の教理において、生命(jīva)には「業の抑止(aupaśamika)」「業の滅尽(kṣāyika)」「(抑止と滅尽の)混合(miśra=kṣāyopāsamika)」及び「業の活動(audayika)」と「本然(pārīnāmika)」の本体(svātattva)がある。[金倉：113-114]を参照。

11 Jacobiによるとleśyāとはサンスクリットのkleśaから派生した単語であるという。kleśaという単語の場合は瞋恚、無智、高慢、貪欲、憎悪といった心理作用、身口意が起こす過ちなどといった否定的な意味合いを持っている。しかしジャイナ教における、レーシャーとは靈魂が善悪の業のどちらに傾いているかを黒色、青色、灰色、赤色、黄色、白色といった6種類の色で表した指標である。白が個我の最上の状態で、黒が最悪の状態となる。レーシャーは白衣派アーガマのUttarādhyayanaでも扱われるジャイナ教の非常に古い概念である。Uttarādhyayanaの34章はこのレーシャーをテーマとしており、それぞれのレーシャーの特徴や、様々な気質の生類にどのレーシャーが備わっているかを説明している [Jacobi: 1895: 196]。



vasanti // JA 38.23

その蒼穹 (tridivapaṭala) から降りて、神々しい享受の住居であるこの大地で、人によって賞賛された徳のある家系に降誕する。そこで最高の身体の神通力を得て、神々が近くにもたらしした永遠なる祭礼に変化した享楽によって、愛されながら暮らす。

この後、輪廻に無関心となり、ジャイナ教の三宝つまり正信・正知・正行を獲得して、苦行に励み、美德の瞑想と純粹の瞑想を為すという。

tato vivekam ālambya virajya jananabhramāt /

triratnaśuddhim āsādyā tapaḥ kṛtvānyaduṣkaram<sup>12</sup> // JA 38.24

dharmadhyānaṃ ca śuklaṃ ca svīkṛtya nijavīryataḥ /

ghātikarmakṣayaṃ kṛtvā vrajanti padam avyayam // JA 38.25

そして分別に依拠して、輪廻に無関心となって、清らかな三宝を得て、他の困難な苦行を為して、美德の瞑想と純粹 [の瞑想] を自己のものとして、自身の勇気によって、破壊業 (ghātikarma)<sup>13</sup> を滅して、不死の境地に到達する。

最終的に破壊業を滅して、不死の境地に至るといふ。つまり一切智者となって、解脱するということであろう。ジャイナ教の祖師や高僧の行伝における、解脱に至るまでの王道ルートを説き明かす内容となっている。

### 総論「タントラ的な美德の瞑想」の特異性

「タントラ的な美德の瞑想」は TAS に説かれるジャイナ教の教義内容を瞑想の対象としていた「聖典に説かれた美德の瞑想」と多くの点で異なっている<sup>14</sup>。例えば、「タントラ的な美德の瞑想」では地水火風などの観想や文法的な意味を為さない一音節の種字マントラなどの象徴的な対象を通して、望んだ結果を得ようとする象徴万能主義が顕著にみられる。そして臍輪や心臓の蓮華といった身体内の生理学的な要素を観想の対象として積極的に活用する点も非常にタントラ思想の影響が著しいと考えられる。

また「タントラ的な美德の瞑想」は効能の強調が極端な傾向がある。例えば、「言葉に関わる瞑想」の字母の観想では聖典に関する知識を獲得し、「形象に関わる瞑想」では

12 注釈では anya に当たる箇所が ananya になっているが、異読がない。

13 ジャイナ教では業は 8 種類に分類され、個我の万全な働きを妨げる 4 種類の破壊業 (ghātikarma) と、身体活動を伴った生存維持のためだけに必要な 4 種類の非破壊業 (aghātikarma) の二種類に大別される。破壊業を全て滅することによって、一切知者となり、残りの非破壊業も滅することで輪廻からの解脱に到達する。

14 TAS における「聖典に説かれた美德の瞑想」と JA における「タントラ的な美德の瞑想」という呼び分けとその違いについては [是松：2020：64-67] を参照。



ヨーガ行者は一切智者になると説いている。また「タントラ的な美徳の瞑想」の効能には魑魅魍魎からの悪影響の無効化、病気の治癒などの現世利益的な傾向もしばしばみられる。

「形象に関わる瞑想」と「形象を超えたものの瞑想」に共通している点は、観想主体と観想対象が同一化するという修行論が強調されていることである。これも「聖典に説かれた美徳の瞑想」には見られない大きな違いである。前述したように「聖典に説かれた美徳の瞑想」は学習・質問・反芻・想起という過程を拠り所としている、ジャイナ教の教説を対象とした瞑想である。「聖典に説かれた美徳の瞑想」には観想主体と観想対象が最終的に合一するという修行論はない。

## 参考文献

### 一次資料

*Ādīpurāṇa* of Jinasena

edited and translated by Pannālāl Jain, 2004 (vol.1) and 2011 (vol. 2) , Bhārātīya Jñānapīṭha: NayīDillī.

*Jñānārṇava* of Śubhacandra

edited and translated by Bālacandra Siddhānta Śāstrī, 1977, Jīvarāja Jaina Granthamālā, Hindī Vibhāga 30, Jaina Saṃskṛti Saṃrakṣaka Sangha: Solāpūra.

*Tattvārthāsūtra* of Umāsvāmin

in the *Sarvārthasiddhi*, edited and translated by Phūlacandra Śāstrī, Fourth Edition 1989, Bhārātīya Jñānapīṭha: Nai Dillī.

### 二次資料

Ohira, Suzuko

[1982] *A Study of Tattvārthasūtra with Bhāṣya: With Special Reference to Authorship and Date*, L. D. Institute of Indology: Ahmedabad.

Padmanabh, S. Jaini

[1974] *The Jaina Path of Purification*, 4th Reprint in 2014, Motilal Banarasidass: Delhi.

Qvarnström, Olle

[2012] *A Handbook on the Three Jewels of Jainism: the Yogaśāstra of Hemacandra*, Hindī Grantha Kāryālaya Pabliśara: Mumbaī.

Jacobi, Hermann

[1884] *Jaina Sutras (Part 1)*, *Sacred books of the east vol.22*, Oxford University Press; Oxford.

[1895] *Jaina Sutras (Part.2)*, *Sacred books of the east, vol.45*, Oxford University Press; Oxford [first published], Motial Banarasidass: Delhi 1964[reprinted].

Sogani, Kamala Chand

[2016] “Ethics and Mysticism in Jaina Yoga Spirituality” in *Yoga in Jainism*, 2016, ed. Christopher Key Chapple, Routledge: London.

Uditaprabhā, Sādhvī Uṣā

[2007] *Jaina Dharma meṃ Dhyāna kā Aitihāsika Vikāsa Krama*, Navabhārata Prakāśana: Jodhapura.

Wiley, Kristi L.

[2014] *The A-to-Z of Jainism*, (First Edition 2006, Scarecrow Press, Inc: U.S.A), Vision Books Pvt. Ltd: New Delhi.

金倉圓照

[1944] 『印度精神文化の研究——特にジャイナを中心として』 培風館。

是松宏明

[2020] 「ジャイナ教空衣派における『タントラ的な美徳の瞑想』〈1〉——『物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍasthadhyāna)』について——」 (『東洋学研究 57号』 東洋学研究所、pp. 63-74)

[2021] 「ジャイナ教空衣派における『タントラ的な美徳の瞑想』〈2〉——『言葉に関わる瞑想 (padasthadhyāna)』について——」 (『東洋学研究 58号』 東洋学研究所、pp. 37-55)

鈴木重信

[1930] 『耆那教聖典』 世界聖典全集刊行會 (改造社版)。

引田弘道

[1997] 『ヒンドゥータントリズムの研究』 山喜房佛書林。

キーワード

ジャイナ教、タントリズム、瞑想、シュバチャンドラ、『ジュニャーナールナヴァ』